

平安朝文化に魅了されて

Charmed by Heian Period Culture

鳥居本 幸 代

TORIIMOTO Yukiyo

1 はじめに

私の専門領域は平安朝服飾文化史ですが、広義的には風俗史学の一分野として研究されてきました。この風俗史学という学問領域の礎を築いた研究者の1人に江馬努先生（1884～1979年）がおられ、衣食住すべてに精通されていました。時代祭や映画の時代考証などにも携わられたそうで、私は京都女子大学大学院入学試験の面接で一度だけご尊顔を拝したことがあります。江馬努先生は本学の非常勤講師も勤められていた関係で、毎年、物故者追悼ミサにおいて掲げられた遺影を拝し、その日のことを懐かしんでいます。

さらに、大学院では家政学研究科に在籍しながら、文学研究科においても研究を進めることが認められ、民俗学者であられた高取正男先生（1926～81年）に師事することができました。高取先生からは「一つのことに集中して研究するのではなく、その周辺のことにも注意を払いなさい。のちのち、それが役立つ日がくるのだから」とのご教示をいただきました。現代風にいえば、「たくさんの引き出しを持っておくように…」ということでしょうか。若輩の私には、当時、とても理解できる言葉ではありませんでした。また、「難しいことを難しい言葉で書くのではなく、誰にでも分かるように書くのが優れた論文だ」ともおっしゃっていました。

本学に着任した2003年以降の研究は、その引き出しを開放したかのように平安朝の服飾文化を基盤とした著書を刊行させていただくという幸運に恵まれました。その一端を著作物を通して、振り返りご紹介させていただきたいと思います。

2 『平安朝のファッション文化』誕生までのなが〜い道程

平安時代の服飾文化との出会いは大学において、服飾文化史という科目を履修したことに始まります。授業では上代から江戸時代までの服飾文化の流れを通史的に講義されるのですが、服飾文化に関するレポート提出が求められました。私にとっては身近な存在であった舞楽装束のひとつ^{ばんえ}蜜絵装束をテーマにして取り組みましたところ、大変なお褒めの言葉を頂戴したのです。といいますのも、なかなか蜜絵装束を間近にみるのが不可能であるのに、実際に装束を身につけた経験を踏まえていることなどが評価されたことのようなのでした。このことによって、卒業

論文は「舞楽装束について」と題して現行の舞楽装束を網羅したものとなりました。

さて、大学院においては、とくに平安時代末期の服飾に着眼した修士論文「日本古代末・中世の服飾の一考察－強装束^{こわ}をめぐる－」の完成に取り組みました。この強装束というキーワードを提示して下さったのは誰だろう高取先生で、文献研究の基礎を学び、『中右記』（藤原宗忠）や『小右記』（藤原実資）、『御堂関白記』（藤原道長）など公卿の日記には服飾だけには止まらないさまざまな発見もありました。それらの文献資料から、強装束は院政期に活躍した衛府の官人たちによって生み出されたという根拠を発見し、「鳥羽天皇と源有仁の好みから誕生した」という定説を覆すことができました。修士論文を通して文献研究の面白みを知り、そのスタンスは現在まで継続しています。

はじめての単著『平安朝のファッション文化』（2003年 春秋社 四六版全202頁）が刊行されるまでに、さまざまな切り口で平安時代の服飾文化の考察に取り組み、次のような論文を発表しました。

①平安末期の服飾についての一考察－強装束の成立をめぐる－

（1980年 服飾美学会発行 「服飾美学」第9号 pp.39-53）

鳥羽上皇院政期において、上皇と衛府官人が一つとなった強装束が成立したことを文献資料より立証するとともに服飾美学的観点からも考察した。

②平安末期の男子服飾について－祭礼装束との接点－

（1981年 関西衣生活研究会発行 「衣生活研究」6, 7月合併号第8巻第3, 4号 pp.54-58）

平安末期は田楽をはじめとする芸能が、祭礼と密着することによっておおいに発展した時期であった。種々の祭礼の中心的存在は衛府の官人たちであり、彼らの服飾の特異性を考察した。

③『源氏物語絵巻』にみる女性服飾の一考察 上・下

（1983年 関西衣生活研究会発行 「衣生活研究」6.7月合併号第10巻第3.4号 pp.62-66、9月号第10巻第5号 pp.58-61）

『源氏物語絵巻』の女性の服飾にみられる色、文様の二面より考察するとともに、『源氏物語』の描写の相違についても考察した。

④『平家物語』にみる武者の服飾について

（1984年 服飾美学会発行 「服飾美学」第13号 pp.14-28）

軍記物語の中においては服飾の描写が多くみられる『平家物語』において、鎧と直垂に焦点を当てた。そこでは、作中人物の性質と装束の関係が色濃く描出され、鎧と直垂のコーディネート^{コーディネート}を美学的に追究した。

⑤『紫式部日記』における晴装束の一考察

（1985年 日本服飾学会発行 「日本服飾学会誌」第4号 pp.64-72）

『紫式部日記』は、作者が中宮彰子の宮廷サロンで体験した諸行事を中心とする女性の晴

装束についての描写が詳細である。特に晴装束うち唐衣裳にみる繡、筋、置口などの装飾法の一々を明らかにし服色ばかりでなく装飾にも注意が払われていたことが判明した。

⑥『源氏物語』に描かれた衣について

(1985年 京都女子大学被服学会発行 「京都女子大学被服学雑誌」30 pp.19-24)

『源氏物語』に多く見られるは衣あるいは御衣という語について、登場人物の身分、地位などに重点をおいて論究した。

⑦『源氏物語』と色 上・下

(1985年 関西衣生活研究会発行 「衣生活研究」9月号第12巻第5号 pp.48-54、10月号第12巻第6号 pp.52-60)

『源氏物語』のなかには、50もの色名が描写されている。装束の色は四季おりおり、季節感だけでなく、着装者の身分、地位、立場が色に投影されて表現されていることを明らかにした。

⑧平安朝服飾にみる唐^{から}への憧憬

(1986年 服飾美学学会発行 「服飾美学」第15号 pp.17-31)

日本服飾文化史の分野において、9世紀末の遣唐使廃止により服飾の唐風に一掃され、以後、我国独自の発達をみたというのが定説となっていた。しかしながら、平安朝文学のなかでは、服飾、色、文様、素材などあらゆるものに「唐」という語を冠させた用例が頻出している。この点に注目し、唐国がもっていた伝説的、神秘的魔力が王朝人に投影し、潜在的に唐への憧憬というべきものが存在していたという点を論及した。

⑨『源氏物語』の服飾にみる「なえたるもの」と「こわきもの」

(1986年 樟蔭東女子短期大学発行 「樟蔭東女子短期大学研究論集」第5号 pp.1-12)

『源氏物語』にみられる服飾を「なえ」と「こわ」の両極面から探ることによって、装束から強装束への転換への過程と平安朝服飾表現の特異性を明らかにした。

⑩重色目・桜に関する一考察－源氏物語を中心に－

(1991年 神戸女子短期大学発行 「論攷」37巻 pp.125-134)

重色目は平安時代の服色を特徴づける一要因で、王朝人の四季の移ろいを重んじた色彩観に基づいたものである。特に桜という色は特異な存在であり、『源氏物語』においては直衣、細長、汗衫に限定してみられる色である。着用は高貴な身分の者に限られ、その色に託して作中人物の性格や容姿を代弁させていることを明確にした。

⑪『栄華物語』にみる裳の装飾－とくに摺裳について－

(1993年 日本服飾学会発行 「日本服飾学会誌」第12号 pp.93-99)

平安女流文学の一翼をなす『栄華物語』は公事に関する記述が多く、晴装束を中心として描かれている。とくに女性の装束においては唐衣裳姿が多く登場し、その記述から裳の代表的存在である摺裳について考察した。

⑫平安朝・童装束に関する一考察－汗衫について－

(1997年 日本服飾学会発行「日本服飾学会誌」第16号 pp.55-61)

平安時代の童女装束である汗衫について、『源氏物語』と『栄華物語』より考察を試みた。『源氏物語』における着用例は私的な遊興行事におけるものが多い。一方、『栄華物語』では宮廷の重要な年中行事である五節に関して舞姫に仕える童女の装束に見られ、公事としての着用例が多い。行事の性格は相反するものであるが、ともに童女の女主人の服飾に対する美意識が強く反映していることが明らかになった。

以上のような論文の土台があって『平安朝のファッション文化』が誕生するわけですが、すでに発表している論文の再録ではなく、すべてが書き下ろしとなり、

| | |
|----------------|-------------------|
| 序 章 王朝人の生活環境 | 第1章 王朝貴族の服飾 |
| 第2章 王朝の色彩と文様 | 第3章 王朝の諸行事にみる装束 |
| 第4章 王朝の男文化と女文化 | 終 章 後世まで継承された王朝装束 |

という構成になりました。

この『平安朝のファッション文化』刊行以後も一貫して、平安朝の文化を探究することに変わりはありませんでした。本学人間文化学部生活福祉文化学科編『生活へのまなざし』（2004年 ナカニシヤ出版発行 A5版 全229頁）においては「平安朝の貴族ファッションと色彩」（P41-53）、生活福祉文化学部編『生活へのまなざし』Part II（2008年 ナカニシヤ出版発行 A5版 全229頁）には「平安時代の敬老行事と高齢者ファッション」（P29-38）、生活福祉文化学部『生活福祉文化資源の探究－これからの日本の生活様式を求めて－』（2013年 ナカニシヤ出版発行 A5版 全258頁）には「平安朝ファッションの規範における現代的意味」（P207-221）を発表することができました。また、京都大学こころの未来センターの研究プロジェクトに参画し、2010年、創元社より発行された『平安京のコスモロジー』（四六版 全221頁）に「平安朝の食とファッション」（P91-100）が収録されました。

さらに、『國文学』第50巻4号「平安時代の文学とその臨界」（2005年 学燈社発行 A5版 全197頁）には「平安朝装束を彩る重色目」（P70-79）、NHK知るを楽しむ「歴史に好奇心 京都きもの玉手箱」（2007年 日本放送出版協会発行 四六版 全172頁）には「平安朝ファッション再発見」（P94-112）、源氏物語の雅び『平安京と王朝びと』（2008年 京都新聞出版センター発行 B5版 全158頁）においては「貴族の衣装」（P86-97）と「貴族の食生活」（P98-109）の2章を担当するなど、読み物としての執筆活動が展開することになりました。

加えて、僧侶の法衣について歴史的研究実績から2003年、比叡山延暦寺で上演された比叡山薪歌舞伎「比叡の曙 若き日の最澄」において最澄役を演じた二世坂田藤十郎丈が着用した法衣の時代考証、そして、2007年に宇治市源氏物語ミュージアムのリニューアルオープンに際して、展示される平安時代の女性装束などの監修、小倉百人一首殿堂・時雨殿 秋の企画展「おじゃる丸と学ぶ！ 王朝びとのくらし大発見」（開催期間 2012年9月30日～12月24日）の監修も長きにわたって、服飾を中心とした平安朝文化の研究成果からの依頼であったと考えられますが文献から具現化する難しさとともに、楽しさも知ることができました。

3 なぜ、異分野の『精進料理と日本人』が書けたのか？

本学人間文化学科において担当している「京都学」では、サブタイトルとして「京の食文化を探る」と銘打って、拙著『精進料理と日本人』をテキストとして精進料理を中心とした食文化を講義しています。私の専門分野とは、まったく、かけ離れているように思われるでしょう。

しかしながら、自宅が比叡山の麓にある赤山禅院^{せきざん}という天台宗寺院の石製の大鳥居の横にあり、そのことから「鳥居本」と名乗りはじめたと伝えられているほど、お寺とは近い関係にありました。現在でも、この赤山禅院の僧侶は精進料理を食されていますが、私が幼い頃は、「フーテンの寅さん」に登場する御前さまのような老僧ばかりが住まわれていましたので、法要のあとのお齋^{とき}と称される食事に肉も魚も使われていないなというぐらいの認識しかありませんでした。

ところが、あるとき、高校生や大学生の小僧さんたちが住むことになったことで、私は「精進料理」の存在を深く認識するようになりました。ちょうど、そのころ作家の司馬遼太郎氏が週刊誌に連載中の『街道をゆく』・叡山の諸道の巻、泰山府君の項で、赤山禅院について次のように書いたのです。

境内は、せまい。瓦ぶきの拝殿へすすむ石畳みの脇に天幕が張られていて、信心にかかわりのあるいろんなものが売られている。

利口そうな少女が店のぬしで、近づいてみると齡頃の娘さんのようでもある。髪をつよくひつつめ、きりきりと後で束ねたいかにもいさぎよい性格を持っていそうなひとで、赤山禅院のゆらいをきくと、

「叡山の別院どす」

ということであった。……お坊さんは他行しているのか姿が見えない。売店の娘さんが、このささやかな伽藍を守っているという感じである。

司馬さんから「売店の娘さん」と呼ばれた私は、年少の頃にも増して頻繁に出入りするようになっていたのです。そんなある日、ふとしたきっかけで彼らの食事の手伝いをするようになりました。

それまで、精進料理といえば定番の野菜の煮物や和え物、胡麻豆腐などであらうと考えていたのですが、食べ盛りの彼らは精進のカレーを作るというのです。肉は蒟蒻や薄揚げで代用し、ジャガイモ、ニンジンなどの野菜を入れた、まさにヘルシーなカレーの出来上がりでした。今なら、夏野菜のカレーなどもあり、珍しくありませんが、これによって私の抱いていた「精進料理」の概念は一変してしまいました。精進料理専門店の料理やお齋が「ハレ」とするならば、精進カレーは「ケ」の精進料理の最たるものでしょう。アマチュアという気楽さから、和洋いろいろな食材を用い、形式にとらわれない精進料理に挑戦してみました。彼らの食事の手伝いをするなかで、「肉、魚を使わない料理」の世界は大きく膨らんだものでした。

さて、このような経験したことから、第2作目として思いついたのは精進料理のレシピ集で

した。しかし、典座を経験された禅僧が、私が目指した精進料理レシピ集は、すでに、たくさん著作されていたのです。既刊の精進料理本にないものは、歴史的観点にたったものだと考え、

序の巻 精進料理と日本料理

壺の巻 古代大宮人の食生活

貳の巻 仏教伝来による食文化の変貌

参の巻 茶禅一味とは－禅の精神が支えた中世の食文化

与の巻 料理法の進展と南蛮文化

五の巻 「和食」の誕生

六の巻 隠元と精進料理の発展

結の巻 精進料理と肉食文化

の構成で、2006年に『精進料理と日本人』（四六版 全270頁）が完成し、装丁には、私の手作り料理の写真が使用され満足のゆくものとなりました。それには、本学図書館には食分野の多くの蔵書が役立ち、感謝してもしきれません。

後年、思わぬことから精進料理の蘊蓄とレシピを1000字程度で記す「あじやりさんの食卓」（天台宗・一隅を照らす運動機関誌『きらめき』2012～2015年）の連載をお引き受けする機会に恵まれました。14回にわたるもので、

第27号 胡麻と葛粉のコラボレーション・胡麻豆腐

第28号 精進茶碗蒸し

第29号 和風あんかけ揚げ蕎麦

第30号 高野豆腐フライ

第31号 焼きふろふき大根

第32号 かりかりがんもどき（飛龍頭）

第33号 あらめとお揚げさんのたいたん

第34号 納豆サンドウィッチ

第35号 揚げ餅雑煮

第36号 春の訪れを感じる筍とピーマンの炒め物

第37号 お星様キラキラ 七夕そうめん

第38号 まん丸賀茂茄子の揚げ出し

第39号 冬の夜はあつあつのじゃが芋グラタン

第40号 平安時代のお菓子里にそっくりな揚げギョウザ

と、一風変わった精進料理を提案しました。「まん丸賀茂茄子の揚げ出し」を除き、さらに「野菜たっぷり精進カレー」「残り野菜を上手に使った八宝菜」「蓮根のつくね焼き」を加えた動画がYou Tubeで公開されています。もともと、料理好きでしたので「あじやりさんの食卓」という連載は、当初の念願がかなったものになりました。

しかし、『精進料理と日本人』、「あじやりさんの食卓」にしても仏教的知識なしでは著述できるものではありませんでした。幸いにして、平安朝の服飾文化から派生して法衣に興味を持ち、「慈恵大師と法衣－素絹濫觴説をめぐって－」（『元三慈恵大師の研究』1984年 同朋社発行 全606頁 担当部分P287-298）、「天台宗の法衣」（天台宗実践叢書第5巻 莊巖・仏具・法衣・諸書式 1992年 大蔵舎発行 担当部分P159-219）、「服飾文化史からみた裾の意味」（村中祐生先生古稀記念論文集『大乘佛教思想の研究』山喜房書林発行 全959頁 担当部分P775-784）や印度学仏教学会や天台学会での論文発表が大いに役立ったといっても過言ではありません。

なぜなら、ヘルシー志向にある現代人の食生活において、精進料理＝ベジタリアンと混同されがちですが、精進料理は仏教の出家者および在家者が最低限、守らなければならない「五戒」



第 28 号 精進茶碗蒸し



第 29 号 和風あんかけ揚げそば



第 34 号 納豆サンドウィッチ



第 35 号 揚げ餅雑煮



第 39 号 冬の夜はあつあつの
じゃが芋グラタン



第 40 号 平安時代のお菓子里に
そっくりな揚げギョウザ

のひとつ、生命あるものの生命を断つこと戒めた不殺生戒の実践なのです。それゆえ、鳥獣魚貝類などを用いない、限定された食材で調理されるのです。食品ロスが平然と行われている現在、仏教的理念に基づく精進料理を通して、食べ物大切さを訴えたいと考えています。

4 研究者の扉を開き、愛してやまない雅楽から生まれた『雅楽一時空を超えた遙かな調べ』

私が平安時代の装束に魅了され、研究者への道を歩み始めたきっかけの第1番目は雅楽との出会いでした。大学入学とともに、雅楽を教授されてい自宅近くにある鷺森神社の雅楽会に入門して以来、50年近くが経過しましたが、当時は今日ほど伝統音楽が注目されていませんでした。「趣味は雅楽です」というと、真顔で「雅楽って何？能楽よりも古いの？」と聞き返されるほどマイナーな存在でした。

そもそも、私が笙や龍笛の音色をはじめて耳にしたのは高校の古文の授業の時に、担当教諭は古文の文法などはそこそこに、自らそれらの雅楽器を演奏してくださったのです。今日では体感を伴う授業として評価されるべきものかもしれませんが、一風、変わった授業風景であったことはいうまでもありません。今にして思えば、平安貴族が好んだ雅楽を通して平安時代の雰囲気が理解できるようにと誘って下さったのでしょう。

さて、雅楽は5世紀から10世紀にかけて、中国や朝鮮半島など広くアジアの国々から伝来した外来の楽舞です。『日本書紀』によると5世紀前半に即位したといわれる允恭天皇崩御に際し

て、朝鮮半島南東部に栄えた新羅の王が 80 人の新羅楽演奏家を遣わしたのが雅楽伝来の初見です。

対馬から筑紫を経由して難波津に至ったが、道中、どこでも大声をあげて泣き悲しんだ。彼らは麻の喪服を着て、種々の楽器を演奏し、舞いながら難波津から都まで行列した。そして、^{もがりのみや}殯宮での葬送儀礼にも参列した。

と記されています。その後、百済や高句麗、唐からの音楽ももたらされ、仏教に深く帰依した聖徳太子によって法会を荘厳する音楽として発展しました。世界最古のオーケストラともいわれ、演奏の進行係ともいえる指揮者のいない、演奏者は男性に限られているのが特徴です。平安時代に入ると貴族の教養の一つとなり、『源氏物語』紅葉賀の巻では、美貌の貴公子・光源氏と頭中将が舞う「青海波」がこの上もなく美しい姿であったと記されています。

現在、雅楽は次のように、

- 1、^{くにぶりのうたまい}国風歌舞と呼ばれ、古来、日本で歌い継がれてきた楽舞。
- 2、五世紀から 10 世紀にかけて、広くアジアの国々から伝えられた外来音楽を起源とする管絃。
- 3、雅楽の伴奏で舞う舞楽。
- 4、平安後期に誕生し、雅楽を伴奏に用いる^{さいばら}催馬楽、^{ろうえい}朗詠などの歌曲。

の 4 分野から成り立っています。私は主に舞楽の修練を積み、現在では小学生から大人までの後進の指導に当たっています。

このような経緯から、舞楽装束を主として唐衣裳装束（俗にいう十二単）にいたるまで、平安時代の装束をみずから身に纏うことができたのです。この第 3 作目にいたるまでに舞楽装束に関する論文を発表していました。

①現行舞楽装束文様考（1984 年 日本服飾学会発行 日本服飾学会誌第 3 号 pp.10-19）

舞楽装束に配された文様を検討した結果、植物文様と幾何学文様は平安朝期における有職文様が多くみられるが、動物文様は大陸伝来の想像上のものが主流であることを明らかにした。

②平安朝期における五節舞姫装束

（1986 年 日本風俗史学会発行 風俗・日本風俗史学会誌第 25 巻第 2 号 pp.1-12）

五節舞姫装束の構成、色彩の変遷ならびに着装法の特異性について平安朝女流文学、日記および有職故実書などより考察を行った。

③現在舞楽装束の全貌 1, 2, 3, 4

（1984～1985 年 関西衣生活研究会発行 衣生活研究 10 月号 第 11 巻第 6 号 pp.58-62、同 11 月号第 11 巻第 7 号 pp.53-57、同 12 月号第 11 巻第 8 号 pp.54-57、同 1・2 月合併号 第 11 巻第 9・10 号 pp.70-80）

現在、舞楽装束は襲装束、変絵装束、裃襦装束、別装束に区別され、概ね、室町時代に完成したものである。それらの形態、色、文様、構成に主眼を置いて考察するとともに

筆者が実際に舞楽を舞うことによって得られた所作が装束に及ぼす影響や形態の変化をも追究した。

④舞楽装束にみる動物文様について

(1992年 日本服飾学会発行 日本服飾学会誌第11号 pp.82-93)

舞楽装束に表現された動物文様について、文様のもつ意味、伝来経路に注目し、平安時代前後の文様形式の変化に注目した。とりわけ、舞楽は奈良時代に大陸より伝来した外来の舞踏であることに留意しながら考察した。

⑤『源氏物語』にみる雅楽の展開

(2005年 思文閣出版発行『文化の航跡－創造と伝播－』P67-81)

『源氏物語』には「胡蝶」の巻があるように、雅楽に関する記述が多く見られる。それらは年中行事との関わりが深く、また、平安貴族の教養としての意味合いも有したものであることを明確に論じた。

これら8編の論文は『雅楽 時空を超えた遙かな調べ』(2007年 春秋社発行 四六版 全279頁)の1部分を成すものとなったことはいまでもありませんが、その構成は

はじめに

第1章 悠久の大地に生まれた天平の調べ

第2章 王朝文化と雅楽ルネッサンス

第3章 花開く雅楽－宮廷行事の雅な調べと舞

第4章 守り継がれる王朝の調べ

おわりに

と文献資料を基にした雅楽文化考ともいえるべき一書となり、長年の趣味であり、研究者としての道に導いてくれた雅楽に関する著作の完成は無上の喜びとなりました。

また、人間文化学科において本書をテキストとして「日本伝統文化論」を論じていますが、私自身が演奏者・演舞者となって龍笛の演奏体験や舞楽観賞を盛り込んでいます。

5 住環境にも踏み込むことができた『千年の都 平安京の暮らし』

『平安朝のファッション文化』、『精進料理と日本人』を刊行できたことによって衣分野、食分野の著書が誕生しましたが、衣服ともっとも近い関係を持つ住分野にも視野を広げねばならないと考えるようになりました。

たとえば、貴婦人は長袴を着用していましたが、鎌倉時代以降は脱ぎ捨ててしまい、その後、明治時代まで女性の袴姿はみられなくなってしまうのです。なぜなのでしょう。平安時代の貴族の邸宅は寝殿造と称する住宅様式で、室内はすべて板敷きだったのです。彼女たちは底冷えのする冬の平安京で快適に過ごすために、長袴を着用していたのではないのでしょうか。現に鎌倉時代以降、畳の専有面積は増大していったのです。このように服飾の構成や形態の変化には、住環境が大きく関わっているのです。

当初の企画は、平安京遷都以後の京都の住まいというもので、実際、江戸時代までの原稿が

完成していました。しかしながら、編集者と協議の結果、平安時代に限定し、住環境を基盤として貴族のくらしを物語る構成に転換することになりました。『平安朝のファッション文化』においても寝殿造など平安貴族の邸宅については概説していましたが、前3作と異なり脆弱な知識であったことはいうまでもありません。

このような紆余曲折ののち完成した『千年の都 平安京のくらし』（2014年 春秋社発行 四六版 全285頁）は、再度、平安時代の文学や日記などを読み返してみることで、新たな視点に立って平安京に住まう天皇はじめ、貴族のくらしを物語ることができたのではないかと思います。とくに、図版や写真を多用するように心がけ、

はじめに

青龍の巻 千年の古都・平安京の誕生

朱雀の巻 大内裏で政を行う

白虎の巻 天皇のくらし

玄武の巻 貴族のすまい

の4部構成で、各章のタイトルも平安京が四神相応の地であるといわれたことから四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）からネーミングしました。

6 ユネスコ無形文化遺産登録に呼応した『和食に恋してー和食文化考ー』

2013年12月、「和食ー日本人の伝統的な食文化ー」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日本の和食から世界の和食になったといわれています。

和食が今日のような姿を整えたのは江戸時代ですが、同時に「江戸」と「京坂」の食の嗜好も対照的になりました。たとえば、『南総里見八犬伝』で有名な滝沢（曲亭）馬琴は享和2年（1802）夏、京都を訪れた旅行記『羈旅漫録』のなかで、「都人は吝嗇^{りんしょく}（度を過ぎた儉約）で、とくに魚料理と舟便は良くない」と痛烈に批判しています。他方、「麴・湯葉・芋・みず菜・うどんは味がよい」と記し、京の味を褒めています。江戸生まれの馬琴には、海から遠い京の魚料理は口に合わなかったのでしょう。

さて、現代人はどうでしょう。関東と関西の味の違いは厳然たるものですが、他国の料理も抵抗なく受け入れています。まさに、「食」のグローバル化ですね。このような環境のなか、和食のユネスコ無形文化遺産登録にあたって、

1、多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重

2、健康的な食生活を支える栄養バランス

3、自然の美しさや季節の移ろいの表現

4、正月などの年中行事との密接な関わり

の4点の和食の特徴がアピールされました。季節感が薄らぎ、和食の来歴も不案内になりつつある昨今、ユネスコ無形文化遺産登録のサブタイトル「日本人の伝統的な食文化」は、日本国内において日本人が和食を再認識する良い機会となったと考えられます。

本書は純然たる学術書はなく、文化史的視点に立脚し、文献資料を用いて分かりやすく論じた読み物という位置づけであったため、口語体での表現となりました。さらに、出版間際まで『和食とは何だろうーその魅力をたずねて』というタイトルで進められていましたが、『和食に

恋して－和食文化考－』（2015年 春秋社発行 四六版 全272頁）というソフトなものに変更され一般書らしくなったような気がしました。その構成は

壺の膳 和食とは？

二の膳 ごはん ー和食の必須アイテムー

参の膳 出汁と醤油が和食の決め手

与の膳 旬を大切にする ーお魚と野菜についてー

五の膳 加工・保存食の醍醐味 ー豆腐と納豆、お漬け物ー

六の膳 江戸のファスト・フード ーすしと天ぷらとお蕎麦とー

七の膳 知っておきたい祈りの食文化

ですが、本書の執筆にあたり、和食には「祈り」と「感謝」が根底に流れていることを私自身、強く再確認することにもなりました。

7 京都に生まれたからこそ著述できた『京都人にも教えたい 京都百景』

京都生まれ、京都市育ちの私は、第4作目の『千年の都 平安京のくらし』を執筆している時、「京都に生まれ、育った者には、京都のことを書くのは難しい」と挫折しそうになったことがありました。それは京都に生まれ、育った者は、こんなことは京都人なら誰でも知っていることで、それを、今更、書き立てることこそ、大仰ではないだろうかと思っていたからです。

現に、いわゆる「京都本」の著者の多くは京都人ではなく、京都の魅力に取り憑かれて京都に移住された方や、頻繁に京都に足を運んでいる方々のようです。

さて、このようなトラウマから抜け出せたのは、『京都人にも教えたい 京都百景』（2017年 春秋社発行 四六版 全240頁）の執筆に取りかかる1年前2016年2月から春秋社のPR雑誌『春秋』に「京都十景」と題したエッセイを連載させていただいたことによります。衣食住を網羅して京都の魅力を伝えるというもので、

その壺 「京の台所・錦市場と伊藤若冲」 (2016年2、3月号)

その式 「秀吉が変えた観桜スタイルー花宴から花見へー」 (2016年4月号)

その参 「天子も恐れた鬼門」 (2016年5月号)

その四 「京料理の眼目は魚」 (2016年6月号)

その五 「遊びの技は蹴鞠」 (2016年7月号)

その六 「京の名水」 (2016年8、9月号)

その七 「出雲の阿国が傾く」 (2016年10月号)

その八 「美貌の公達も憧れた芳しい香り」 (2016年11月号)

その九 「尚齒会という日本初の敬老会」 (2016年12月号)

その十 「弥次さん、喜多さんも驚いた京の着倒れ」 (2017年1月号)

となりました。エッセイは論文調を書き慣れている私にとって、短文の中に思いの丈を凝縮す

ることの難しさがありました。この前段階を経て誕生した『京都人にも教えたい 京都百景』は文学、史実、伝承などをもとに京都の名所旧跡や風俗、文化などを紹介するエッセイ仕立てのガイドブックとなりました。既刊の京都のガイドブックの大半は、地域分けのものが多かったため、それとは異なるグルーピングすることに努めた結果、

其の一 花を愛でる

[北野天満宮・醍醐寺・仁和寺・大田神社・梨木神社・常林寺・小倉山・神護寺]

其の二 平安の才女・紫式部がみた都の風景

[廬山寺・清涼寺・渉成園・下鴨神社・勧修寺・野宮神社・大原野神社・雲林院]

其の三 才気煥発・清少納言が体感した平安京つれづれ

[平安神宮・上賀茂神社・京都御所清涼殿・伏見稻荷大社・船岡山・石清水八幡宮・泉涌寺]

其の四 諸行無常の世界

[祇王寺・滝口寺・小督塚・鞍馬寺・五条大橋・三十三間堂・三千院・寂光院]

其の五 都人の口福

[錦市場・壬生寺・松尾大社・南禅寺・萬福寺・建仁寺・京都御所・道喜門]

其の六 都人の信仰を垣間見る

[清水寺・愛宕神社・大文字の送り火・吉田神社・赤山禅院・白峰神宮・八坂神社]

其の七 異界を巡る

[神泉苑・晴明神社・六道珍皇寺・引接寺・上品蓮台寺・化野念仏寺・上御霊神社・下御霊神社・将軍塚]

其の八 名建築を尋ねる

[宇治上神社・平等院・東福寺・相国寺・大徳寺・金閣寺・銀閣寺・飛雲閣・西本願寺・二条城]

其の九 庭園に世の理を観る

[西芳寺・龍安寺・詩仙堂・円光寺・曼殊院・桂離宮・修学院離宮]

などの社寺、名所旧跡を紹介しています。「京都十景」と同様、イメージを膨らませるために写真や図版を挿入することになり、年中行事や季節の花などの写真や図版には、大変な苦勞がありました。

なお、本年3月より天台宗にゆかりのある寺院や史跡を取り上げた「一隅を照らす天台・京都百景」の動画がYou Tubeで公開されます。

おわりに

大学院生からの研究を支えたものは、長年、携わることとなった雅楽との出会いでした。研究と趣味が一致したのではなく、趣味から研究の扉が開かれたのです。その後も身近に接して

いたことが、研究に繋がっていったことは嬉しい限りでした。

最後になりましたが、京都ノートルダム女子大学において充実した教育・研究生活を送ることができましたことは、教職員の皆様のお支えがあつてのことでございます。深く感謝いたしております。

